連載34

在宅医療奮闘記

平成7年より在宅を開始した 私の思い出

（医）東西会 千舟町クリニック院長
橋本 満義（63歳・内科）

援助困難な事例 “ゴキブリさんのお出迎え”

いつものように、独居障害者のIさん（59歳・男性）宅へ訪問診察に行った時のことです。玄関のドアを開けた途端、ゴキブリさんの子どもたちが廊下に多数現れ、私たちを出迎えてくれました。玄関脇には生ゴミが山と積まれており、そこには大きなゴキブリがいたのです。最近では、滅多に出くわさない光景ですが、私が在宅医療を始めた20年前ころは、そんな場面に幾度となく出あっていたので、特に珍しくもありませんでした。

屋内の物をかき分け、いつものように診察をし、Iさんの痛みを和らげるため神経ブロック等の処置をしました。その帰り際、Iさんは私に小さな声でたどたどしく「先生、いつもありがとう。今後ともよろしくお願いします」とおっしゃったので「大丈夫、安心してくださいね。一生懸命ご協力しますから」と、私は答えました。Iさん宅を後にしようと、在宅医療専用車に乗り込むなり私は、当院の責任者にIさん宅の現状を知らせました。そこで、どうしてこんな状況になっているのかが判明したのです。

今まで利用していた他事業者のヘルパーさんやケアマネジャーさん、そして行政の担当者に対してIさんは感情的になり、出入り禁止にしてしまったようなのです。今は、行政と関係スタッフと今後について相談中とのことでした。当院の医療行為についてIさんは継続を希望されていました。当院は週一回の訪問診療が担当、それ以上のサービスは介護領域で行うべきことなので当院で行うのは困難なのです。とりあえず、部屋の掃除などボランティアで当院が善処することにしました。

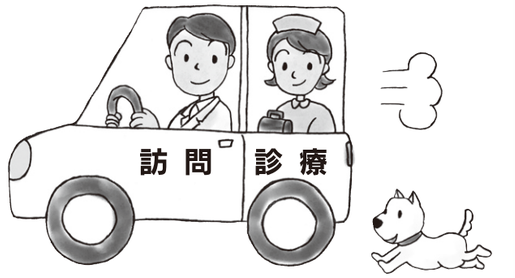
しばらくして、急に体調不良となり救急病院に緊急搬送され、脱水傾向もあったのでそのまま入院となりました。本人は自宅での療養を強く希望されていましたが、自宅療養は困難との判断でその願いはかないませんでした。その後一時、精神病院に転院となったようです。

Iさんが退院されたなら、またご相談に応じようと今でも思っているのです。

現在、患者さん中心の在宅療養支援のために、色々な介護医療提供がなされ、「クオリティオブライフ」を満たすことが求められています。

しかし、今回の件のようにご本人自らの行動により八方ふさがりになった患者さんに対して、やむを得ないボランティア行為をすることは大切なことだと思うのです。とはいえ、逆にそうした行為が周囲に理解されず、誤解され、批判される場合も、私たちは数多く経験してきています。ですが、あきらめないで前に進むことも大切なことだと私は考えています。それは、私たちに業務に対する真の誇りをもたらし、心を磨くためでもあります。またそれが、国策でもあるからです。

「お医者さんが来てくれる」
質の高い 在宅医療・看護・介護
を『千舟町クリニック』は目指しています。



機能強化型・有床 在宅療養支援診療所
（医）東西会 千舟町クリニック
松山市千舟町6-4-9 Tel:089-933-3788
http://www.touzaikai.jp/